

---

# 白く染まる夜

常盤 暁

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

白く染まる夜

### 【Nコード】

N6819P

### 【作者名】

常盤 暁

### 【あらすじ】

季節ごとのイベントを題材にした短編小説です。

今回はクリスマスを基にした小説です。

僕が拠点としてこの地域は毎年真つ白な雪が降る。

深く積もって、子供たちが雪だるまやかまくらなんかを作って遊んだりしている。

そんな冬の時期。

仕事は必ず師走の25日に行く。初め日本には僕らの存在はなかったが、明治維新で外国の文化が流入した時に僕の先祖もこの地に渡ってきた。

それから、ずっと子供たちのために働いている。

父が病で寝込んでから7年、今は僕が第五代目としてこの仕事をしている。

そう、僕の職業はサンタだ。

明かりも乏しくなった深夜を見計らって、民家の屋根に上る。

さくさくと、降り積もった雪に足跡を残しながら指をぱちんと鳴らすと風がビュウツと吹いた。

肩にかけて鞆を大きく開く。すると風に乗って集まってきた子供たちからの手紙が、吸い込まれるように入っていく。

毎晩毎晩これを続ける。春夏秋冬、毎日。子ども達がサンタ宛の手紙を必ずしもクリスマスの時期に書くとは限らないから。

全部回収して、なるべく願いを叶えたい。

それが僕の願い。

日本中から集まった子供たちの手紙をひとつひとつ丁寧に読む。

小さい字や丸い字、絵付きのカード、様々だ。

それらの情報をノートに記していく。ここには、子供たち一人一人のデータが載っている。

例えば、好きな色とか、好きな物、事、食べ物、嫌いなもの、学校での出来事、最近の行いまで。

データを基に、プレゼントの内容を決定する。これが僕の主な仕事だ。

クリスマスになると、町にサンタやトナカイ、天使とかの装飾が増えるけど、どうしてサンタはおじいさんという印象が強いんだろう。サンタが白ひげのおじいさんだと子供たちが思っているのなら、きっと僕を見て残念がるに違いない。

だって僕はまだ人間の年齢で、24を過ぎたばかりだからだ。白ひげのなるのはまだ遠く先のこと。

万年筆をおいて軽くため息をつく。今日の分のデータはもう書き込めた。

これでクリスマスイヴにちゃんと仕事ができそうだ。

ふと机を見ると、軽く折りたたんであるだけの便箋が目に入った。

………またか。

毎回毎回届く手紙。今年でもう何回目だろう。深い青い便箋に、白い雪のような白い字で。

『えっ！？わっわっわっ！！』

大きい袋にバランスを崩して、サンタとあろうものが屋根から落ちてしまった。  
それもごろごろとみっともない転がり方で、人の多い昼間に、袋ごと地面に落下する。運良く人がいなかったので姿を見られることは免れた、と思っただら。

『サンタ……が、落ちてきた』

『……！』

自分ほどの制服を着た男の子が、俺の下敷きになって唾然としている。

なんとお約束なことに、人間の下に落ちてしまっていた。

何かについてはサンタのくせに、とからかってきたそいつは、口調はとげとげしいのに、不器用な俺に優しくしてくれた。

父が寝込み、一人で仕事をする俺の体調を案じて、ココアを作ってくれたり、マフラーを買ってくれたりした。

温かかった、彼の隣。初仕事で不安で怖かった日も彼がそばにいて、小さい頃母が歌ってくれたララバイを歌ってくれた。

家族の温もりに久しく触れてなかった俺に、その温かみを思い出させてくれた。

普通とは違う感情を持ったのは、もう、すぐの話だった。

『お前人間に正体を明かしたな？』

突然父から言われた言葉に、背筋が凍った。

『お前のことは常に見ている。信用してないわけじゃない。…始めての仕事だからな。でも』

その後の言葉は容易に想像できた。

『まさかお前が、人間と仲良くなるとは…。それがいけないことだつてわかっているよな？』

頷くしかない。それは僕もよく知っていることだから。父はわかっているならいい、と笑う。

『人間とは別れる。その前に記憶を消してな』

その人から自分の記憶を消すということはどれほど怖いことなんだろう。

そしてそんなことができる力を持っているサンタというのもどれほど怖い存在なんだろう。

『どしたの？今日配達の日だろ？準備しなくていいのか？』

『記憶を、』

『え？』

『記憶を、消す。僕の存在を、君から。…そうしなきゃいけないんだ、そうしなきゃ』

彼に伝えると言うよりは、自分に言い聞かせている、そんな感じだった。

だけどどんな理由を正当化させても、疑問は増える。これで、いいの？

『記憶を消すって、何だよ、どうしてそんなこと』

『…っ！…！』

触れてきた手を、振り払った。涙が溢れて視界がぼやける。

冷えた頬に温かい何かが伝った。

最後に見たのは、白い世界だった。

あれから7年もたつ。今はもう仕事にも慣れてきた。

もう屋根から落ちたりなんかしないし、そもそも昼間にサンタとして外に出たりはしない。

あの時、まだ力があつた父は、今はもう衰えて死を持つだけの日々を過ごしている。

もうすべて変わってしまった。

変わらないのは手紙だけだ。

いや、手紙といえるものでもない、ただの便箋一枚。

ここにのせてある思いはあの時からまったく変わらない。

そして、また僕の思いもあの時から姿を変えることなく、残っている。

窓を見ると、雪が静かに降っていた。明日もきっと寒いだろう。

机の上にある便箋に、そつと触れる。  
そして白い字をそつとなぞった。

『貴方に、会いたい』

e n d

(後書き)

お読みいただきありがとうございました。  
いかがだったでしょうか？

良ければ、感想、コメント等ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6819p/>

---

白く染まる夜

2010年12月30日18時17分発行